

# 保險本質論における加入目的論の 止揚について

印 南 博 吉

## 第一節 心理主義の缺陷

保險の本質を明らかにするためには、保險の本体（契約であるか、經濟上の仕組であるか）、保險の職能、及び保險の方法（技術）の三面を明らかにしなければならない（一）のであるが、第二の、保險の職能又は目的に就いては最も多く議論の存する所であつて、保險の本質に関する學説は、殆んどこの問題を中心として發展したと、と云うことが出来る。ところで從來殆んどすべての説は、保險の職能又は目的を、加入者の立場から、保險加入の目的として捉えようとするのが例であつた。それが加入者の主観に関わるものであり、心理的な動機の把握を旨指したことは、様々な學説が対立し、統一を見ない大きな原因の一つであると言ひ得よう。蓋し言う迄も無く、人々の自由な主観的意図を、客観的に規定しようとし、之を包括して普遍妥当性をもたせようと試みても、その試み自体が出发点からして無理であり、目的を達し得ないことは明らかだからである。それにも拘わらず、從來このような試みが続けられたのは、一つには法律的解釋論の影響に由るものと言えよう。即ち法律論的な立場からは、保險契約を締結する目的の解釋が極めて重要視されるからである。そうして「損害の填補」と云う觀念は、或る客観性を帯びるが故に、意見の

相違を来さずに済んだのであるが、生命保険の解釈に至つて、このような客観的手がかりが得られぬ為め、極度に紛糾するに至つたのである。その結果、或いは加入目的に対する自己の解釈を一方的に正しいと主張して他人にも承認させようと努め、或いは広く多くの場合に妥当させる為め極度に広い観念を適用しようとする弊風が生じた。確保説の如きは此の後者の例に属するものと言ひ得よう。

もつとも確保説の有力な主張者の一人である近藤博士は、このような法律論的見地とは全然關係なく、ゾンバルトの経済理論に基いて、主観的な加入目的の規定を目指すものようである。博士は言う、「ゾムバルトによれば、経済組織の理念は、三つの構成部分から成立つてゐる。即ち、精神（經濟意識）、形式（秩序）、技術（方法）である。随つて、ここに特殊経済組織としての保険を問題とする場合、これを保険の精神、形式、及び方法に分つて考察するのが妥当であらう。ところで、ここに保険の精神というのは、保険に加入する人間を規定する目的設定、動機及び行為の規則の全部をいうのであつて、従来の保険学者が、保険の目的または職能と称してゐるものに外ならない。即ち、保険の目的は、これを、保険加入者を支配する主観的な精神（subjektive Geist）若しくは保険加入者をして保険に加入せしめるところの動機となる心理的考量に求むべきである。そして、その意味において、保険の一般効用こそ保険の目的を規定するものといふことが出来よう」(1)と。右の見地から博士は、「保険の目的をば、保険加入者の心理的考量に求めんとする立場をとる限り、それは常に偶発的欲求の充足よりは、むしろ、経済生活の安定或は確保欲望の満足に求めるべきである」(2)と言ひ、「保険の前提たるべき経済生活の不安定を一種の意識形態として理解する場合、我々は明確に不安定と資本主義との必然的な關係を把へることが出来る」(3)と言ひ。

(1) 近藤博士「保険学総論」、八三頁。

(2) 同右、八六頁。

(3) 同右、八九頁。

しかし乍ら近藤博士の立場の誤つてゐることは、ゾンバルト自身の言葉に徴して明白であると思う。即ち彼は、「精神科学並びに経済学の建設の妨害となるような三つの誤つた観察方法」の一つとして、心理主義 Psychologismus を挙げ、「心理主義の誤謬はそのままでも、既に經驗的に証明される」のであるが、「心理主義的立場の支持すべからざるより深い理由は、一般に認識論的性質のものである。文化従つて経済は物體的でもなく、心理的でもなく、特殊の一範圍である。それは非心的な意味成体 nicht-psychisches Sinngelbilde から成立してゐる。それは精神 Geist である。しかし乍ら精神を心理 Seele より「誘導」し、精神を心理に還元し、又精神を心理より理解しようとすることは、悪しき形而上学から生じた無駄な努力である」(1)と述べてゐるのである。「特にゾムバルトのいわゆる理解的経済学の立場から保険の本質を把握せんと試みた」(2)博士が、内外の保険学界を通じて最も秀拔な保険本質論の研究を展開され乍ら、極めて肝要な点において、ゾンバルトが「邪道」と名づけてゐる誤謬に陥つてゐることは、惜みても余りあることである。

(1) W. Sombart, Die drei Nationalökonomien, 1930. 小島博士監修邦訳「三つの経済学」一九四、一九八、一九九頁。

(2) 近藤博士「保険経済学」第二巻、序、二頁。参照、同第一巻、七五—七七頁。

茲に注意せねばならぬことは、同じく確保説を主張し乍らも、小島博士は「保険の前提たるべき経済生活の不安定」を、「一種の意識形態」又は「保険加入者を支配する主観的な精神」とは見ないことである。即ち博士は言う。「経済生活の不安定と云ふことは、私経済の経済そのものの不安定 (unstable)」、または「不安固 (unsafe)」なるを指すのであつて、経済生活を営む人の心の不安なる (anxiety) を指すのではない。詳言すれば、各人の経済生活と云う事実が、客觀的に、不安定性を有することを云うのであつて、この生活を営む人の心理状態が、主觀的に、不安

の状態にあることを云うのではない。勿論、経済生活そのものが不安定である以上、この事柄を諒知する人は、また、その心の安らかでないの言うまでもなきことであるが、この心の不安なると、経済生活そのものの不安定なることは、明らかに区別せねばならぬ<sup>(1)</sup>と。そうして、保険なるものは、「保険金の支払によつて、加入者の経済生活を安定せしむる所にその本質的な職能がある」<sup>(2)</sup>と云うのであつて、入用説の欠陥は「保険の経済的目的と技術的構成とを明確に区別しないところにある」<sup>(3)</sup>と云う近藤博士の批難は、そのまま小島博士の見解にも適用しうるに近いと言わねばならない。

(1) 小島博士「保険学総論」三三三頁。

(2) 同右、二二二、二二三頁。

(3) 近藤博士「保険経済学」第二卷、九八頁。

## 第二節 入用説の反省

確保説について指摘したところの、心理主義の誤謬は、入用説において完全に免れているのであろうか。欲望と云う純然たる心理的現象と異なり、「入用はハツキリそれとつかみうる事実」<sup>(1)</sup> *ein scharf für sich erfasslicher Tatbestand* であると主張されるのであるが、「入用とは実践的意欲から生ずる要求 *Forderung* であり、このような意欲の充実に適するものに対して支配を獲得せんとするものである」<sup>(2)</sup>とす限り、それは未だ脳裡における現象たるに止まり、未だ具体性をもたぬことに注意せねばならない。現に志田博士は「入用とは欲望を満足する手段としての或ものに想到したとき生ずる意識状態」<sup>(3)</sup>であると述べ、ゴツビは入用を「客観的意味における欲望」<sup>(4)</sup> *disegno in senso oggettivo* と述べている。勿論ウェツディゲンも認めているように、入用を充足することは、

手段を調達することであり、従つて入用充足過程即ち手段調達過程が客観的に把握しうる経済現象である<sup>(6)</sup>ことは之を承認することが出来よう。しかし乍ら入用説においては常に、加入者の主観的な入用充足目的が中心に据えられ、全然客観的な現象として保険を説明した例は見当らない。之が為めに、入用説は他の多くの保険学説と同様に、加入目的の解釈に關する是非の論議の中に捲き込まれてゐるのである。既に詳論したように、この種の学説のうちで入用説が最も勝れたものであり乍ら、尙お完全に説得力を有せず、種々の疑問を惹き起すことを免れないのは、主として右のような原因に基くものと言えよう。

(1) F. v. Gortl-Ortlienfeld, Bedarf und Deckung, 1928, S.2.

(2) Derselbe, Wesen und Grundbegriffe der Wirtschaft, 1933, S.5. 邦訳書「一四頁。

(3) 志田博士「我邦に於ける保険学説としての入用充足説の現情」明大商学論叢、第三卷五号、九頁。

(4) U. Gobbi, L'assicurazione in generale, nuova edizione, 1938, S.24.

(5) W. Weddigen, Der Versicherungsbegriff der Wirtschaftswissenschaft, ZVW., 31. Bd., 1931, S.245.

もつとも、保険に類する他の経済現象についても、やはり心理主義的立場に立つことが一般的であり、利用者の主観的目的に立脚して概念規定を行なうことが一般に必要であると認められてゐるならば、問題は別である。ところが他の経済現象については、保険学説について見られるような主観主義的な態度は少しも執られておらず、単に合目的行為乃至経済効果獲得の或る行為として、専ら客観的な立場から把握されてゐるのである。試みに若干の例を挙げて見るならば、保険と同様に貨幣操作経営経済の一種である銀行に對する諸学者の定義として、「銀行業は貨幣流通及び信用流通の媒介を行なう経済機關の活動である」<sup>(1)</sup>、銀行の本性は「代替的可動的な資本の利益の取引」<sup>(2)</sup>に在る。「銀行業は貨幣資本の蒐集、貯藏及び調達を行なうものである」<sup>(3)</sup>、「銀行とは貨幣の需要者と供給者との間に

立ちて、自己の計算に於て、広く両者と信用取引を為すを業とする者を謂ふ」<sup>4)</sup>、「營業資金を外來資金に仰ぎ——受信業務——他方において之を貸付割引——与信業務——に使用することを營業とする金融機関である」<sup>5)</sup>、「銀行とは資金を売買するものである」<sup>6)</sup>「現代銀行の本質は經濟社会における資金供給者と需要者との間に立つて資金の需給投合を図ることにある」<sup>7)</sup>等、どの定義も悉く客觀的な立場に立つており、少しも銀行施設を利用する者の主觀的な目的には拘束されてゐない。

- (1) H. Sauter, Die Effektenbanken, 1890, S. 1.
- (2) A. Weber, Depositenbanken und Spekulationsbanken, 1922, S. 2f.
- (3) R. Liefmann, Beteiligungs- und Finanzierungsgesellschaften, 1923, S. 554.
- (4) 山崎寛次郎博士「銀行論」<sup>1)</sup>—三頁。
- (5) Schulze-Gaevernitz, Die deutsche Kreditbank, S. 11.
- (6) 高垣寅次郎博士「銀行論」現代經濟学全集第十二卷、三四頁。
- (7) 山口茂博士「銀行論」六頁。

或いは倉庫業の定義を見るに、「貨物の保管を目的とする營業」<sup>1)</sup>、「倉庫業とは他人の爲めに貨物の保管を目的とする營業」<sup>2)</sup>である。「多数の個別經濟に対して継続的に貨物保管なる用役を提供し、其の報價として保管料を受け、最初から經營主体が問題とされているが故に、当然右のような結果が見られると反駁する向も有らうと思われる。よつて經營主体と関わりなく考察される所の金融現象に関する定義を見るに、金融には三種の意義が有つて、最広義では「貨幣たる形態に於て購買力の移動すること」であり、広義では、資金の移動を謂い、狹義では、資金の融

通即ち貸借に依るその移動を指す(4)、と云う見解にせよ、「金融現象とは……利殖の目的をもち、且つ将来に於ける還流を豫期したる貨幣の一方的流通に他ならぬ」と云う見解にせよ、その客観的立場に立つてゐることについては、少しも疑を挟み得ないのである。同様に商業概念についても、「商業の国民経済的(または社会経済的)機能を財貨の移転又は配給に求めんとする説は、今日多数学者の認むる所である。……商業経営の担当する財貨の移転又は配給という経済活動の目的は何処に存するか、私は内池、緒方両教授の主張に賛成して、貨物の生産者と消費者との間に存する人的、場所的、時間的懸隔を克服することを目的とするものと解する」と云うように、商人の立場を離れてなお客観的な立場から考察してゐるのである。

(1) 内池廉吉博士「倉庫論」商学全集第二十一卷、一頁。

(2) 内池博士「倉庫論」改造社版経済学全集第三十七卷、二七三頁。

(3) 野村寅三郎氏「倉庫論」商学研究の葉、三〇九頁。

(4) 小島昌太郎博士「金融機構論」四—五頁。同説山口茂博士「銀行論」七頁、「金融総論」九頁。

(5) 橋爪明男氏「金融論」現代金融経済全集、第一卷、五頁。

(6) 増地庸治郎博士「商業通論」商学全集第一卷、三、四頁。

右のような事実と対照するとき、主観主義的立場から脱却し得ないで昏迷を続ける保険本質論をめぐる論争の果敢なきが如何に痛感されることであらう。概念規定が極度の客観性を要求されるにも拘わらず、主観的、心理的な目的観念の解釈をその中に持込もうとすることは、それ自体が矛盾した試みであると言わねばなるまい。勿論客観的な立場に立つとしても、概念規定に関する争が一掃されるわけではない。しかし乍ら、それが主観主義に偶いされる無用な昏迷と空しい努力から一挙にして脱却する途であることは銘記されねばならない。しかも此のような客観的立場に

立脚する保険本質論が従来存在しなかつた訳ではなかつた。以下このような立場に属する保険学説を紹介批判し、保険本質の正しい把握への途を明らかにするであらう。

### 第三節 給付説の缺陷

多くの保険学説にとつて躓きの石と成つてゐる生命保険に対する商法の規定は、保険本質論上興味ある示唆を与えるものである。即ち商法第六百七十三条は、生命保険契約について、次のような定義を下している。「生命保険契約は当事者の一方が相手方又は第三者の生死に關し一定の金額を支払うべきことを約し相手方が之に其報酬を与うることを約するに因りて其効力を生ず」。茲には保険の目的又は職能が、生死に關して一定金額を支払うことに在ると規定され、全然加入者の利用目的に觸れていない。法律は全く客觀的な立場に立つて保険契約を規定し、加入目的をめぐる煩わしい議論から超越してゐるのである。このような立場は、保険本質論上、給付説 *Leistungstheorie* と呼ばれるものに属する。マーンスは給付説について、この説をとるのは大抵法律家であり、事實上保険契約のみを考察するものであるから、むしろ契約説 *Vertragstheorie* と呼んだ方が良いであらう(一)と述べてゐる。しかし乍ら彼の説には賛成し得ない。何故ならば、保険を契約として考察する学説は幾らも存在してゐて、單に此の説のみの特徴ではないし、此の説の特徴は、やはり保険の目的が特殊な給付を行うことにあるとし、加入者の主觀的な目的に立入らぬ点に在るからである。

(一) A. Manes, *Versicherungswesen*, 5, Aufl., Band 1, S. 9, Anm. 4.

給付説の最も古い代表者と見られるカルプは、一八八五年に公にした生命保険に関する著書で、保険を次のように定義した(一)。即ち、「保険と云う言葉は保証すると云うことから来ており、国民經濟上の意味では、団体と確率



計算とに基き且保險証券と呼ばれる契約で締結される一種の取引を指すものである。その契約に依つて、一方の契約者即ち保險者は、保險料と呼ばれる報酬に対し、一定の偶然事實が発生した場合に、保險金と呼ばれる一定の利益又は賠償の提供を約束するものである」と。そうして彼の説明に依れば、保險とは偶然的な損失に対する保証であると云う定義は適切ではない。何故ならば保險は損失に対する保險だけでなく、一定の利益の保証でもあるからである。この種の取引は保險者にとつても被保險者にとつても利益又は満足を齎らす、従つて契約者双方にとつて事實上給付でもあれば反対給付でもある。保險者のうる利益は、保險料収入とその慎重な利用に在り、その損失は豫め定めた偶然事實の發生に在る。又被保險者の利益は豫め定めた偶然事實の發生に在り、その損失は、それが發生しないのに、又は（生命保險の場合）豫想の時点よりズツト遅れて初めて發生するに、保險料を払込むことである。なお、保險は保証された損害填補であると規定する定義も誤である、けだし保險契約が無くとも損害填補の保証が与えられる場合は無数に存するからである(2)。

(1) W. Karup, *Handbuch der Lebensversicherung*, 2. Aufl., 1885, S. 1.

(2) a. a. O., S. 2.

カループの見解は、法律的な見方から經濟的な見方への過渡的な性質を帯びており、保險を契約として把握し、又偶然事實の發生が被保險者の利益であると見る点などに欠陥有るを免れない。しかし乍ら、生命保險を論ずるためも有つて、損害説に対し批判的な態度をとつてゐることは注目さるべきであらう。但し彼の定義は手際よく纏まつてゐるとは言い難い為めもあり、之に追隨する学者は無かつたようである。彼とは全然無關係に、ブリーマーは、一九〇四年に、次のような定義を示した。即ち、「經濟上の意味における保險とは、保險加入者が一回又は繰返して貨幣を以て払込む対価を受取つて、關係者の意思とは無關係の出来事が發生した際に、保險加入者又はその庇護者に（リス

クの最高額を限度として「貨幣を支払う義務を、保険者が引受けることである」と。此の定義は、保険を契約と解するものでなく、むしろ経済的な意味における保険の定義であることを明らかにしているのであるが、保険の技術的方面が全然説明されていないことが、一つの大きな欠陥に成っている。なお法律的な立場で給付説的な見解をとる学者としては、アレクサンダー・カッツ、フイック、コッホ・ベルグマン等<sup>(6)</sup>があり、二元説 zweiteilige Definition (dualistische oder alternative Definition) をとって、損害保険には損害説、人保険には給付説の立場をとる学者としては、エーレンベルクやエンツィンハスなどを挙げる<sup>(7)</sup>ことが出来る<sup>(8)</sup>。

(一) Karl Brämer, in Handbuch der Wirtschaftskunde Deutschlands, Bd. IV. 1904, S. 140. 但し彼が兄（ヘルマン・ブローター）著した旧著 Das Versicherungswesen, 1894, S. 2. では損害説をとっていた。

(二) P. Alexander-Katz, Gesetz über die privaten Versicherungsunternehmungen vom 12. Mai 1901, S. 9. F.

Fick, Der juristische Charakter des Lebensversicherungsvertrages, 1884, S. 16. Koch-Guldm, in Assekuranz-Jahrbuch, 1908, XXIX Jahrgang, S. 93. 但し Krosta, Ueber den Begriff Versicherung, 1910, S. 38—42. 24頁<sup>(9)</sup>

(三) V. Ehrenberg, Artikel, Begriff, juristisch, in Versicherungsfleikon, 1. Aufl., 1909, Sp. 213. A. Emminghaus, Versicherungswesen, in Handwörterbuch der Staatswissenschaften, VII. Band, 1901, S. 446 ff.

給付説論者の個々の定義については、それぞれ各種の点について欠陥が見出されるとしても、条件的な給付として把握する限り、加入者の心理を離れて、全く客観的に保険を規定しうる特長の存することは否定し得ない。但し之を主張する法学者は勿論、経済的な見地に立つ者も、保険の技術的方面の規定を欠いていること、既に見た通りである。仍つて試みに給付説の立場をとり、且つ保険の技術的方面を正しく表現するとすれば、ほぼ次のような定義が得られるであらう。即ち、

「保険とは、多数の経済体が集まり、その内一定の偶然事実が実現した者に対して、所定の給付を行なうため、その偶然事実実現の確率に基いて、費用を分担する経済施設である」。右の文言のうち、所定の給付と云うのは、豫め定めた一定の条件に従つて行なわれる給付の意味であつて、一定額の給付と云う意味ではない。

さて右の定義は、保険の目的について加入者の主観的心理的意識の解釈に触れることなく、全く客観的に捉えてゐる。更に又保険の方法に就いても正しく且詳細に規定してゐるであらう。それでは此の定義は最も満足すべきものであるかと云うに、決してそうではない。何故ならば、多数者を集め、偶然事実の実現を条件として一定の給付を行なう所の賭博、殊に富籤に対して此の定義がそのまま当てはまるのみならず、或種の無尽なども此の定義に含まれ得るからである。クロスタは此の説を評して、「此の説が成立した所以は、（入用説の場合と同様に）学者たちが生命保険を損害保険の部に含ませることが出来ず、さりとて生命保険に特有な標識を見出し得ないため、単に給付として片づけた *einfach durch Leistung abtaten* ことに在る」と述べ、此の説は「余りにも色彩に乏しい」(7) zu farblos 即ち特色をもつていない、と評してゐる。けだし凡ゆる経済は給付的行為のみから成つており、従つて給付概念は保険を他の経済行為から区別し得るような概念では決してあり得ないからである(8)。特に保険が偶然的な給付を行なう点においては、外見上賭博と極めて類似しており、何等かの限定的な規定を加えない以上、保険と賭博とを区別することは不可能であらう。

(一) B. Krosta, a. a. O., S. 79.

(二) H. Wagenführ, *Wirtschaftskunde des Versicherungswesens*, 1938, S. 21.

この点に関し想起されるべきは、ヘルマンの保険学説である。けだし彼の保険学説は一般に賭博説 Spieltheorie と呼ばれ、その著書において屢々保険賭博 Versicherungs Glückspiel と保険富籤 Versicherungslotto, Versiche-

rungslosterie<sup>(7)</sup>等の語を使っているからである。但し從來極めて僅かな例外を除き、殆んどすべての保険学者は彼の学説を誤解し來つたが故に、問題の中心について論ずる前に、少しく彼の説に対する諸学者の評価について触れておこうと思う。例えばマーネスは、ヘルマンの述べている所は、呆れる程偏つており且誤つてゐる<sup>(8)</sup>so verblüffend einseitig und schiefと云ふ、又彼の著書の中に交ぜ入れてある巧まぬでもない冗談に人々は腹を抱えることである<sup>(9)</sup>man ergötze sich an der mit unfreiwilligem Humor gewürzten Schriftと云うような評言を下しながら、肝要な点について全く偏つた見解を懷いているのである。マーネスに限らず、一般に保険学者たちは彼の説の真価を認めることなく、又彼の説の欠陥として、保険を余りにも広い意義に解し、乞食や借金乃至保証施設（例えば避雷針）をも保険の範疇に含めたと云うこと、若しくは保険と富籤とを同一視した<sup>(4)</sup>と云うことを指摘する。しかし乍ら彼が保険を広義に解しているのは、「保険の任務及び發展段階」と題する第七章においてであつて、それ以外の章では大抵常に普通の保険に就いて論じているのである。又彼は保険事業は特殊な形式の富籤に喩えることが出来ると主張するのであるが、両者の相違は之を明らかにしており、況んや保険加入の目的と賭博目的とを同視したものでは決してない。故に例えばクロスタが、賭博説の特殊な欠陥として、保険加入目的と賭博目的との殆んど相反せる立場を無視した点を挙げ、多くの学者の説を引証している<sup>(6)</sup>のであるが、ヘルマン自身が保険加入目的と賭博目的とは対蹠的であることを明らかに認めている<sup>(6)</sup>のである故、奇怪な見解であると言わねばならない。しかも此の種の無理解な風潮は今日に至るも続いているのである。独逸の保険学者中、ヘルマンの学説に共鳴し、又は理解ある態度を示したのは、法学者で賭博契約説を採つた者や、保険と保証を同一視したに止まる者を除けば、僅かに、エルベルツハーゲン<sup>(7)</sup>、ロイクフェルト<sup>(8)</sup>、リンデンバウムぐらゐのものであらう<sup>(9)</sup>。我國においても同様であり、さきに近藤博士<sup>(10)</sup>及び私<sup>(11)</sup>が彼の理論の長所を明示し、近くは斎藤教授が理解有る態度で詳細に紹介し批判している<sup>(12)</sup>。

外は、殆んどヘルマン説の特長を看過し來つたのである(13)。

- (1) E. Herrmann, Die Theorie der Versicherung vom wirtschaftlichen Standpunkte, 3. Aufl., 1897, S. 41, 54 u. passim.
- (2) A. Manes, Artikel "Versicherung", Versicherungsexikon, 1. Aufl., 1909, Sp. 1428.
- (3) A. Manes, Versicherungswesen, a. a. O., S. 9, Anm. 2.
- (4) E. Herrmann, a. a. O., S. 108ff.
- (5) B. Krosta, a. a. O., S. 79ff.
- (6) E. Herrmann, a. a. O., S. 58ff.
- (7) H. Elbertzagen, Besprechung von E. Hermanns Schrift, Zeitschrift für Versicherungs-Recht und-Wissenschaft, 4. Bd., 1898, S. 760ff.

此の書評の全訳は、拙稿「エマヌエル・ヘルマンに就いて」(保険学論集第二輯「戦争と保険」一一一—一六頁に載せてある。その中で彼は、「實際彼の著書が我々に提供しているのは、もはや灰色の理論ではなく、本當に黄金なす生活の樹なのである。……惟うにヘルマンの「保険の理論」こそは、常に保険の新らしいやり方を案出すべき保険實際家、それも上級の實際家 Praktiker im grossen Styl の読むべき書である」と云うやうに述べている。

- (8) G. Leuckfeld, Die Theorie der Versicherung in der deutschen Wissenschaft, ZVW., 1901, S. 216ff.
- (9) J. Lindenbaum, Ein Vierteljahrhundert der Bedarftheorie u. s. w., Ztschr. f. Nationalökonomie, Bd. II, 1930, S. 76. 彼は「ヘルマンも、ワグナーもゴッピも、皆純粹科学を事とした人々 Männer der reinen Wissenschaft であり、彼等の著述に含まれている主要な思想は、保険理論に関して其後現われた殆んど總べての著述に対し、今日に至る迄有益な影響を与えている」と述べ、且つ暗にマーネスを諷して、或る学説に立脚してヘルマンの学説を見下すような態度で嘲笑する場合にのみ、彼の名前を挙げるが如きことは、甚だ穩當を欠く」と述べている。

(10) 近藤博士「保險經濟學」第二卷、四一頁以下、同「保險學総論」四四頁以下。

(11) 拙稿「エマヌエル・ヘルマンに就いて」同上、三頁以下。

(12) 齋藤利三郎教授「ヘルマンの保險理論の研究」經濟理論、第八号以下。

(13) かつて岡野敬次郎博士は、「保險は賭博に非ざる乎」と云う論文を草し、保險と賭博とは「純理に於て二者毫末も異なるあるを見ざるなり」と断じ、その理由を詳述した後、「是余が二者其本質に於て区別する所なしと謂う所以なり」と結んでいる。(法学協會雜誌第六十七号、昭和二十二年七月、転載、本邦生命保險業史、一三二—一三三頁)。しかし法律的な賭博契約説は、ヘルマンの經濟的な「賭博説」とは大いに趣を異にすると云わねばならない。

さて肝要な問題点に還つてヘルマンの主張を窺うに、彼は次のように述べている。「保險事業は、抽籤の時点と賞金額とが不確定な富籤のようなものである。Das Versicherungsgeschäft gleicht einer Lotterie, mit dem Zeitpunkt und den Gewinnsten nach unbestimmten Ziehungen. その抽籤の際は、いつも当り籤だけが出る。之を抽く者は不運な事件、即ち經濟と云う抽籤器の数字盤を廻す盲目の少年 der blinde Krabe am Glücksrade der Wirtschaft. 当り籤として出てくるのは、死亡、疾病、廃疾、一定年齢迄の生存、建物の火災、船舶の沈没、鉄道や船舶による輸送中の商品の破損、抽籤償還に低額の籤を抽き当てること、降電、家畜の死亡、洪水、爆発、落雷、唐突な資本引上の催告、不動産の強制公売、鏡硝子の破壊等々である。当り籤そのものが、賞金額として与えられる額を表示する。賞金額即ち補償金額は、当り籤が或る個人の經濟の周辺において惹き起す障碍と同じ額であることを原則とする」こと。之によつて明らかのように、彼は保險と富籤との區別を明説しているのであつて、保險富籤と云う言葉を使つたのも、むしろ保險を富籤であると見たためでなく、「保險企業は、普通の富籤企業 eine gewöhnliche Lottounternehmung ではなくが、一種の富籤企業である」ことと見るが為めだと言わねばならぬ。彼の

説を賭博説と呼ぶより、富籤企業説と呼ぶ方が適切であらう、と私が主張するもの(3)、右の理由に基くものである。

(1) E. Hermann, a. a. O., S. 40f.

(2) ebenda, S. 66

(3) 拙稿「エマヌエル・ヘルマンの保険学説に就いて」前出二〇頁。拙著「保険経済」一三四頁。

しかし乍ら、保険を以て一種の富籤企業であると規定し、その上で両者の相違を説明しているとしても、ヘルマンの所説は全く技術的方面についてのみ類似点と相違点とを述べているものに外ならない。之は保険を企業として、その客観的技術的特性について考察する限りにおいては敢て差支無く、むしろ此の点に彼の保険学説の著しい特殊性を認め得るのであるが、しかし保険の本質的な職能及びその特殊性、従つて又富籤の職能との本質的な相違が明らかにされていないことは、保険学説としてやはり完全なものとは言い得ない。もちろんヘルマンは、被保険者にとつての保険の目的と、保険者にとつては保険が手段であることを學者たちが混同していると批難し、被保険者にとつての保険の目的は、「運命の齎らす偶然な影響の深刻さを、填補の提供に依つて緩和すること」der zufälligen Einflüssen des Geschickes durch Angebot eines Ersatzes die Spitze abzubrechenであり、従つて確かに、その目的は博戯と反対である(1)、と述べているのであるが、このような保険の目的又は職能が、保険者の立場従つて保険の技術的方面の強調のため、目立たなくなっていることは否定し難い。この点について齋藤教授の述べている次の言葉は教訓的であると思う。即ち、「銀行業者の貸付けけるものが単なる貨幣——流通手段・通貨——であるか、資本であるかという「古来からの繫争問題」について、エンゲルスが、「われわれは銀行の顧客の立場にたつてみなければならぬ。銀行の顧客は何を要求し、かつ入手するか、ということが問題である」とのべ、問題の基本的解決には、産業資本の立場、再生産過程の面から把握すべきことを教えているが、このエンゲルスの補註は、移していまわれわれの場

合にも、きわめて示唆的である」こと。之は当面の場合に移して、保険をその技術に即して単に形態的に把えることに止まらないで、その職能又は利用目的に即して理解すべきことを注意するものと解することが出来よう。但しその目的が、加入者の心理的考量に止まつては成らぬことは、既に述べた所に依つて明らかである。このような目的規定は、保険について果して可能であらうか。此点については稿を改めて卓見を述べることになしたい。

(一) ebenda, a. a. O., S. 60.

(二) 齋藤教授「ヘルマンの保険理論の研究」前出、三〇頁。